

おじいちゃん

八南小・2

てらべ ことね

わたしのおじいちゃんは、きよ年の秋、大きなびよう気のせいでなくなりました。

わたしは、おじいちゃんがびよう気になったときに、お母さんに聞きました。

「おじいちゃんは、どんなびよう気なの。」

「がんとという大きなびよう気だよ。そして、あんまり長く生きられないかもしれないな。」

と、教えてくれました。それを聞いて、わたしはかなしい気もちになりました。

おじいちゃんのびよう気が分かってからは、おじいちゃんにたくさん会いに行きました。いっしょにりよ行にも行きました。いっしょに買い物にも行きました。おじいちゃんの家でたくさんあそんでももらいました。おじいちゃんといっしょにいる時間は、とても楽しかったです。

おじいちゃんは、びよう気をなおすためにたくさんびよういんに行つて、強いくすりをたくさん飲んでいと教えてくれました。それを聞いて、なおってほしいなと思っていました。

でも、ある日の夕方、お父さんかられんらくがきました。お母さんが、わたしたちに、

「おじいちゃんの子がよくないから、ごはんがおわったら、

会いに行くよ。」

と、言いました。わたしは、かなしくなりました。

おじいちゃんの家につく前に、お母さんに「なくなった」とれんらくが来ました。

わたしは、ベッドにねているおじいちゃんを見て、なみだが出そうでした。お母さんは、わたしに、

「手や足をさわってあげて。『おつかれさま』っておじいちゃんに声をかけてあげるんだよ。」

と、言ってくれました。わたしは、言われたとおりにおじいちゃんの手と足をさわりました。おじいちゃんの手と足はとてもつめたくて、足がぱんぱんにふくれていました。おじいちゃんの元気なときの顔ではなくなっていて、とつてもとつてもかなしくなつて、な

みだがたくさん出ました。お母さんに、

「おじいちゃんに手紙を書こうか。」

と言われて、わたしはすぐに書きました。

「この手紙、どうするの。」

「おじいちゃんの下に入れてあげると、こと音の気もちがたわるんだよ。」

わたしは、おじいちゃんの顔の下に手紙をおきました。その後、おじいちゃんに会えたときには手紙はなくなっていたのでつたわったんだと思つて、うれしくなりました。

夏になると、おぼんという日があることもお母さんが教えてくれました。なくなつた人が家に帰ってくる日だと。

「おじいちゃん、おぼんにまつてるね。」

おぼんにわたしは、おじいちゃんの家に行きます。

